

新規市指定文化財の概要説明資料

名 称	きさ べ じょう あと 私 部 城 跡
所在地	交野市私部6丁目1717番, 1720番1, 1721番, 1723番, 1724番, 1738番
所有者	交野市私部1丁目1番1号 交野市土地開発公社
面 積	2,420 m ²
年 代	戦国時代
<p>○市史跡「私部城跡」の概要</p> <p>私部城は別名「交野城」とも呼ばれる平城で、標高は22～28mに位置している。遺跡の規模は東西約400m、南北約300mである。</p> <p>城は、本郭および二郭のほか、三郭、四郭、出郭、その他曲輪で構成される連郭式の平城である。城の北側には百々川が流れ、南側は本丸池などの池が残り、堀として利用していたと考えられる。</p> <p>江戸時代に入ると、城の南側には家が建ち並び一部は郭内にも建築され、現在では郭部分は主に畑地、堀部分は水田として利用される。</p> <p>○歴史的価値を構成する要素</p> <p>【文献史的視点】</p> <p>『寛政重修諸家譜』は、織田信長の家臣の佐久間信盛の娘が私部城主の安見右近に嫁いだと記す。この婚姻により右近は織田家と深く結びつき、石山合戦期に河内に進出してきた時の信長の拠点となる。『原本信長記』によれば元亀元年（1570）十月二十日のこととして、右近は東大阪市の若江城の三好義継、羽曳野市の高屋城の畠山秋高ら中・南河内にいた河内守護と並ぶ存在であったと伝える。</p> <p>しかし『二條宴乗記』は元亀二年（1571）五月十一日に松永久秀は右近を奈良市内で切腹させ、翌日私部城を攻めたと記す。『原本信長記』には翌年の元亀三年（1572）四月のこととして、再び久秀が私部城を攻め、信長は右近の義父の信盛をはじめ柴田勝家ら数万の兵で私部城救援に向かわせ、「しし垣」による包囲戦を用いるなどして松永軍を撃退したとする。</p> <p>右近の死後は信盛の娘が安見家中を統括したため、私部城を「後家が城」とも呼んでいたことが、「河内国正保郷帳」の写しである天保三年（1832）の「河内国一国村高扣帳」などの史料からわかる。</p>	

寛文四年（1664）の光通寺の棟札や無量光寺の梵鐘には私部城主の安見右近が寺を破壊したと刻まれ、また国重要文化財の北田家住宅には同家が安見右近の家臣であったとする系図を所蔵するなど、戦国・江戸時代の私部城の様子を伝える史料に加えて、今も周辺には城に関する記録が残っている。

【考古学的視点】

申請地の一つである本郭の上からみた形は、南北方向を軸とする一辺約60mの正方形である。築城は起伏のあった自然地形に盛土を行い造成している。

発掘調査の結果、本郭からは多量の瓦が出土し、瓦葺き建物が存在したと考えられる。本郭南端には二郭・三郭と連結するため自然地形を平坦に削り出し、通路を造成している。このほか、弥生時代中期の石器を製作していた竪穴住居2棟が確認され、交野市の弥生時代史を考える上でも重要な遺構が地下に保存されている。

もう一つの申請地である二郭の上からみた形は、南北約110m、東西約50mの長方形である。二郭は北側部と南側部は東西に走る道路によって分断されている。発掘調査の結果、高さ1m以上の盛土痕跡もあり、本郭同様に自然地形を利用しつつ土木工事を施して築城している。郭の上面からは井戸や土坑などの遺構のほか、周囲に瓦が散布している柱穴群も確認されている。二郭南端には本郭同様に平坦面が続き、本郭と繋がる。

以上のように、戦国時代の瓦葺き建物のほか、交野市では検出例が稀な弥生時代中期の竪穴住居など、重要な遺構が地下に良好に保存されている。

○史跡の価値

私部城は織田信長の河内進出の拠点となった城で、城主の安見右近は当時の河内守護と並ぶ実力者であったことや、右近死後の城を巡る戦いを史料が詳しく伝えている。また安土城に先行して瓦を採用する数少ない城の一つであったことなど、同城がもつ歴史的価値は高いといえる。

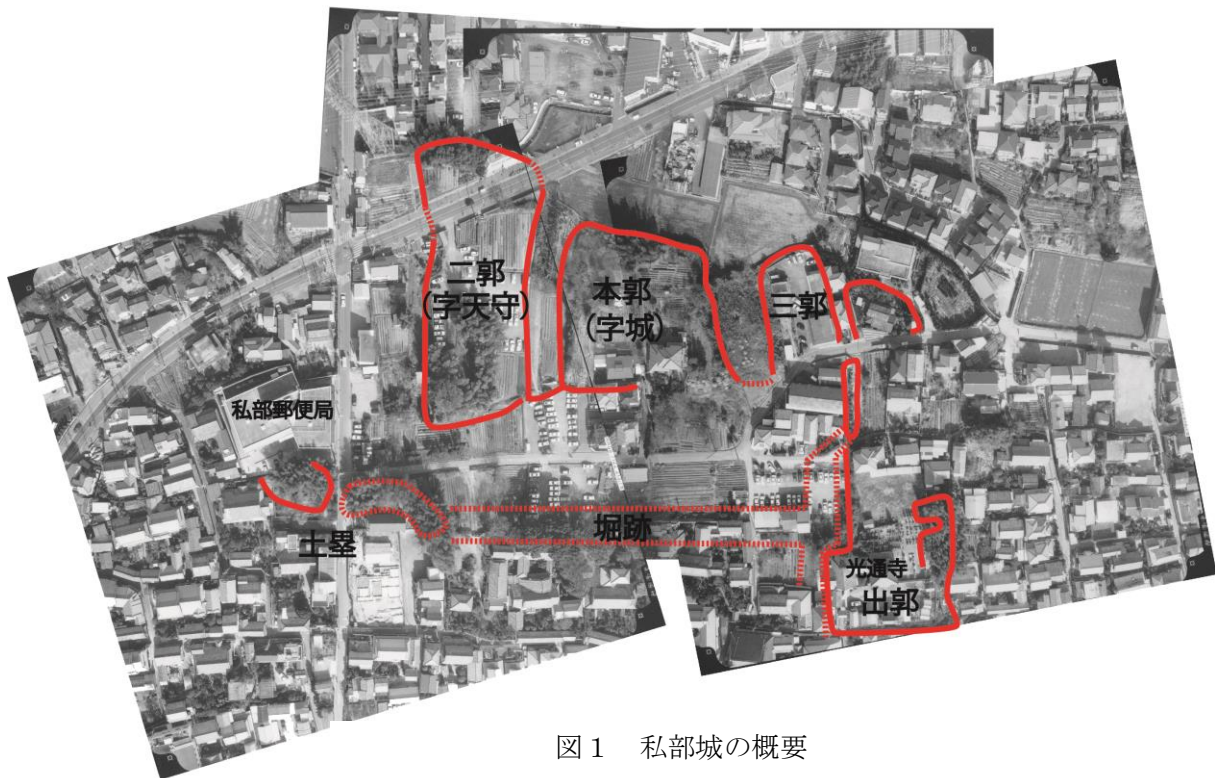
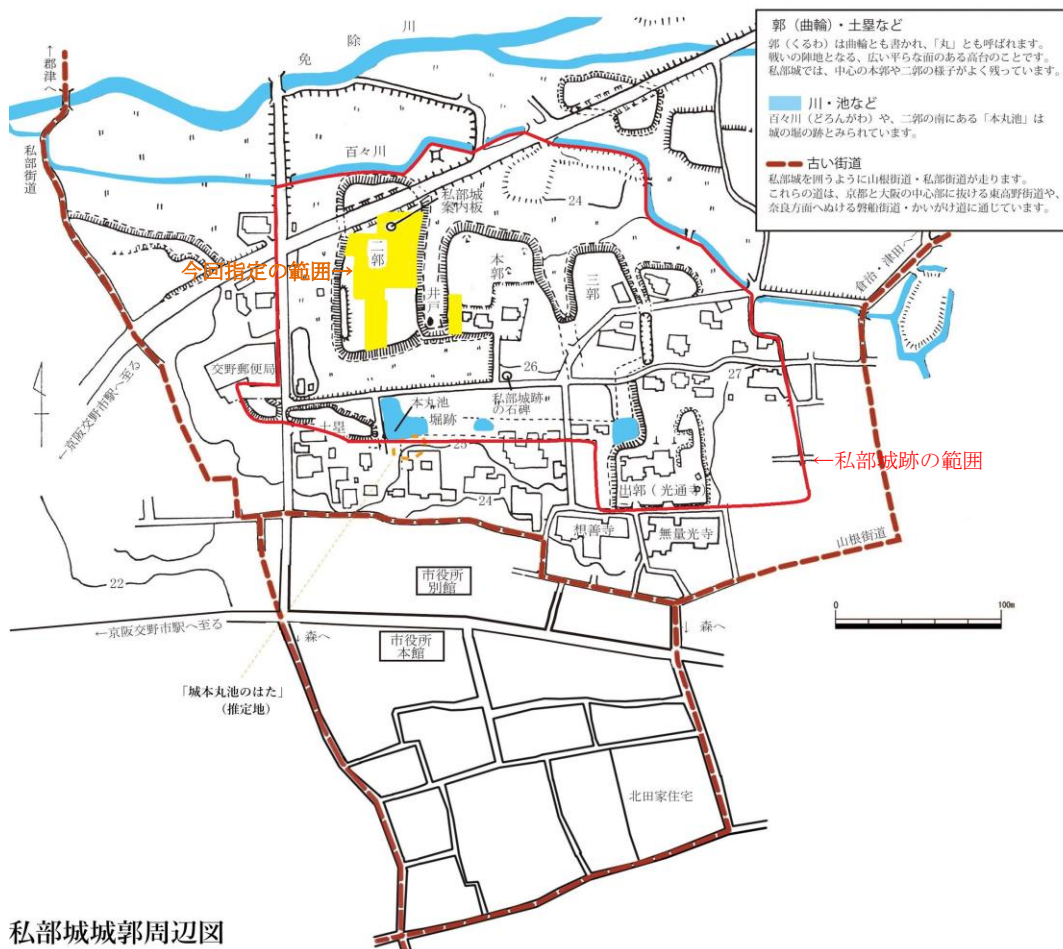


図1 私部城の概要



私部城城郭周辺図

図2 私部城跡周辺図